

圏外のアンテナ

[発光飛行体]の巻

週末の夕方、かすかに聞こえた太鼓の音が気になって自宅の外に出てみると、いつになく人通りが多い。最近引っ越して来たばかりで土地勘がないので、何気なく人の後を付いて行く。

と、最寄り駅の隣の中学校の校庭で、近くの団地の盆踊りと、バザーと、花火大会がてんこもりになったような、夏祭りをやっていた。

静かな住宅地らしからぬ人、人、人…。まるで昭和にタイムスリップしたみたいな賑わいである。

校庭の200mトラックを囲むように、屋台もたくさん。大人たちは、花火を待っているのか、早くもシートで陣取り合戦。大きな子どもたちは、じゃれ合いながら、食べ物の屋台に行列。小さな子どもは我先に、キラキラ光る物（何だろう？）を空に飛ばしている。

子どもたちが手にしている空飛ぶ発光物は、最初、車のCMで見た、生き物のように飛び回るドローン（小型無人機）の群れのようにも見え、次に、アジア各国で爆発的に売れていると聞く、LEDライト搭載の、ゴムで打ち上げるおもちゃのようにも見えたが、う〜む、何かが違う。

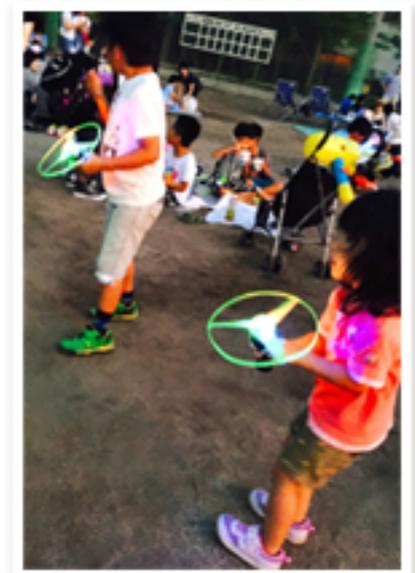
近づいてよく見ると、昔からあるおなじみの形。紐の先を手で引き、軸を回転させて羽を飛ばすヘリコプターにボタン電池が付いただけの、光る玩具だった。

だが、夕焼け空を乱反射するような光を放って飛行する姿は未来的で、その不思議な感じに、思わず見とれてしまう。

懐かしくて新しい物に、人は引かれる。ザハ・ハディド・デザインの国立競技場を選んだ人も、これと同じ感覚を刺激されたのかもしれない。

夏の一夜、過去と未来を乗せた、せつなく美しい虹色の光が、わたしたちの頭上を飛び回っていた。

=2015年8月4日掲載=



いつの時代も光るおもちゃは夏祭りの人気者